

学校で手作りした灯籠を元安川の親水護岸から流し、
平和を祈る四谷中生=26日 (撮影・福井宏史)



灯籠流し体験ヒロシマ

修学旅行生の教材化

回収費軽減 NPOが一役

広島市を訪れる修学旅行生の新たな平和学習として、灯籠流しが広まりそう。昼は原爆資料館(中区)見学などで平和を誓い、夜は静かに犠牲者を追悼する。普及のネックだった灯籠回収も民間ボランティアが協力に乗り出した。「8・6」の時期以外も平和を願う幻想的な光がヒロシマの川面を照らす。

(下久保聖司)

二十六日夜、世界遺産の原爆ドーム(中区)前を流れる元安川。東京都八王子市立四谷中の三年生百七人が一個ずつ手作りの灯籠を流した。「原爆死没者を実際に弔うことでヒロシマを身近に感じたい。他の修学旅行生も体験してほしい」と猿渡

悠紀さん(15)は話す。

四谷中は一九九五年から修学旅行先に広島を選び、間もなく灯籠流しを始めた。大貫康子教諭は東京都町田市の中学でも四回経験した。「平和教育に最適。熱心な教員が赴任校で広めているのは」。翌二十七日には同じ八王子市内の市立松が谷中の三年生が流した。

国土交通省の太田川河川事務所(中区)によると、修学旅行生の灯籠流しが増えたのは九六年に親水護岸を整備して、船から流す時より簡単になって以降という。ただ認知度はまだ低く、最近五年の実績は東京や大阪の学校を中心に年四十六件にとどまっている。

課題は下流で沈んで川や海を汚したり、係留船に燃え移ったりする恐れのある灯籠の回収だった。同事務所事業計画課の横谷友紀専門員(40)は「これまで事務所が回収船を無償出動させたが、一回の経費がかさみ、見直しが必要だった」。

そこで協力を要請されたのが雁木タクシーを運営する特定非営利活動法人(NPO法人)「雁木組」。七月から燃料代などの実費だけで引率教諭も加わって回収している。

新たな平和学習のメニューとして旅行代理店も注目。市の矢野大介修学旅行誘致担当課長(51)も「平和のメッセージが発信でき、夜のイベントで市内の滞在時間も増える」と広がりも期待している。